

## 「病者の塗油」

主任司祭 晴佐久昌英

このたび、敬老ミサにおいて、希望者に「病者の塗油」が授けられることになった。

「病者の塗油」とは、恐れと痛みを抱えている病者に、イエスが「だいじょうぶだよ」と直接触れてくださる秘蹟である。

イエスは、触れる人だった。聖書には、イエスが病気や障害を抱えた人に、深い憐れみを持って直接触れる姿が数多く記されている。行く先々で目の見えない人、耳の聞こえない人、熱を出して寝込んでいる人に触れ、さらには人々から見捨てられ、近寄ることすら恐れられていた重い皮膚病を思っている人に、直接触れる。そうしてイエスに触れていただいた人はみな、体も心も癒され、恐れと絶望から解放され、神の愛を信じる人生をはじめるのである。

「病者の塗油」において、信じるものはみな、このイエスのわざを体験する。司祭が「いつくしみ深い主キリストが聖霊の恵みであなたを助け、罪から解放して、あなたを救い、起き上がらせてくださいますように」と唱えて額と両手に聖香油を塗るとき、人はイエスに触れている。すなわち、天の父の親心に直接触れている。

だれにとっても、病気はつらい。体の痛みもさることながら、恐れと孤独という魂の闇が、つらい。そんなとき、まことの親である神が無限の親心を持って、わが子をその手で抱きしめてくださっているという信仰なしに、どうやって魂の平和を保つことができようか。

かつてこの秘蹟は「終油の秘蹟」と呼ばれ、臨終の人に授けられていたことから、死の間際にならないと受けられないと誤解されてきたが、これは死ぬための秘蹟ではなく、信仰に強められて真に生きるための秘蹟である。入院する前、手術の前など、いつでも、何度でも受けることができる。「老い」自体は病や障害ではないが、体が衰え、死を意識し、恐れと孤独と向かい合う日々こそは、イエスに触れていただく恵みを必要としているのではないだろうか。

一人の少女が死んだとき、イエスは人々に「恐れることはない。ただ信じなさい」と言った。イエスはその少女に触れ、その手を取ると、少女はすぐに起き上がるのである。